

題名 明石うらぎよきようのたんけん

作者名 三和 倫太郎（みわ りんたろう）

学校名 明石市立明石小学校

学年 一年

「カラカラカラカラ」とかくてするどいかねの音がひびいて、十一時に明石うらのせりがはじまつた。木のはこに入つた大きなサワラがすべつてくる。せり人が前に立つて、きんぞくのぼうでドンドンとリズムをつけながら、じゅもんみたいなことばを言つてゐる。すぐに魚やさんたちが、しゅわみたいにゆびでいろんななかたちをつくつて見せる。きづいたら、もうつぎの魚、そのつぎの魚のせりになつてゐる。みんなこわいくらいのいきおいで、とてもはげしくて、ぼくはドキドキした。

なつやすみがあとすこしでおわつてしまふ八月二十三日、ぼくはおかあさんといつしよに、明石うらぎよきようくみあいの見学にきた。ずっとのしみにしていたので、うみの方にじてんしやをこぎながらワクワクした。すこしまよつて、ギリギリセーフではじまりのじかんにまにあつた。はれていてとてもあつかったので、あせびつしょりだつた。まず、二かいのへやで、明石うらぎよきようくみあいちょうのえびすもとさんのはなしをきいた。明石のうみでとれる魚のこと、せりのほうほう、せりを見学するときにちゅういすることなど、しらないことがたくさんあつた。明石のうみでとれる魚は、魚やさんやスーパーで見たり、いえでたべたりしている魚が多かつた。でも、「明石のしゅん」があつて、ほかのところとはちがうこともあるのはしらなかつた。せりのことは、しらないことばかりだつた。せりをみるのははじめてなので、どんなところでどんなかんじなのか、この時はまだよくわからなかつた。でも、むずかしいゆびのあんごうがあることと、せりのじやまをしてはいけないことはわかつた。

そのあと、いよいよせりの見学だ。えびすもとさんといつしよに外に出ると、たくさんのトラックがとまつっていた。ながぐつをはいたおじさんたちが、だいしやで水色のかごをはこんでいる、フォークリフトもうごいでいる。どんどんあるくと、おふろみみたいな大きなはこに水がジャバジャバ入れられてあふれていた。「そろそろせりの時間だからいきましょう。」と言われて、せりのばしょにいく。まつかなガシラがいっぽいはいつたかごの間をとおつて、水びたしのみちをとおつて、みじかいかいだんにのぼつた。そのしゅんかん「カラカラカラカラカラ」とかねの音がひびいて、せりがはじまつた。せりをすすめるやくの人を「せり人」という。せり人が前に立つて、まわりには魚をうごかすかかりの人と、せりのきろくをするかかりの人がいる。魚の台がまん中にあつて、せり人とむかいあつたきんぞくのかいだんにたくさんの魚やさんがならんで立つてゐる。ぼくは「入学しきで、みんなでならんでしやしんやさんにしやしんをとつてもらつた時みたいだ」とおもつた。たのしみにしていたせりの見学は、すごいはくりよくで、きんちようした。せりのばしょは「せりば」、せりをしているだいは「せりだい」とよばれる。せりだいの右から木のはこに入つた魚が出てくる。

さいしょに出てきたのは、ぎんいろのサワラだ。大きくてギラツとひかっている。せり人が「てかぎ」というきんぞくのぼうでせりだいをドンドンとならし、リズムをつけながら、じゅもんのようなことばを言つている。すぐに、かいだんに立つた魚やさんたちが手をあげて、しゅわみたいにゆびで形をつくる。これは、魚のねだんをゆびで言つているそうだ。ぼくも、ゆびでうじをつくるほうほうをおしえてもらつたけど、むずかしくておぼえられなかつた。ぎんいろのサワラ、ぶあついハマチ、ぼくのかおよりもっと大きいカレイ、まつかなガシラ。しんせんな魚がどんどん出てくる。おじさんたちはみんなしんけんで、大きなこえで、すごい早さでじゅもんを言つたり、しゅわをしていた。ぼくは、きんちようして、じつと立つて見ていた。えびすもとさんが、「つぎのグループにこうたいしましよう」と言うのがきこえて、ほつとした。あとで、おかあさんが「あのせり人のおにいさんは、せり人の一年生なんだって。」と言つたのでびつくりした。一年生ということは、せり人になつてすこしかたつていないし、まだべんきょうのとちゅうということだ。ぼくも一年生だけど、あんなふうにみんなの前で、どうどうとなにかをするじしんはない。しつもんしたいことがいっぱいだ。今日のせりでいちばんたかかった魚はマコガレイで、一ぴきで二万円だつたそうだ。

つぎは、せりばのよこにある「プール」の見学をした。「プール」は、学校のプールとはぜんぜんちがう。コンクリートのゆかで、水色のはこがぎっしりとならんでいて、はこのうえに水色のバケツがのつている。バケツには、魚とかい水が入つていて。生きている魚もいるし、しめられた魚もいる。ゆかはかい水があふれて水びたしだ。魚たちはならんで、せりのじゅんばんまちをしている。明石うらでは、魚を生きたまませりにかけるので、しんせんな魚をさかなやさんがかうことができるそうだ。プールには、体ぜんぶがながぐつみたんな、ズボンとエプロンががつたいたようなふくをきているおじさんやおばさんが水の中をバシャバシャあるいはいる。「おとうちやんがうみでとつた魚を、おかあちやんがはまでうるというやくわりぶんたんが、むかしからあります。」とえびすもとさんがおしえてくれた。水色のはこのよこで、おばさんたちがおしゃべりしていた。すぐそばで、すごいはくりよくのせりをしているのに、ここはのんびりしているように見える。魚も人も、うみでりようの時にがんばつてたたかつて、このあとせりのじゅんばんがくるまで、「プール」できゅうけいしているのかな。今日は天気がよくて魚がいっぱいとれたから、プールにはたくさん魚がいるんだそうだ。うみがあれて、魚があまりとれない日もある。今日がはれてよかつた。見学をした八月二十三日は、さいこうきおんが三十六どのもうしょ日だつた。プールやせりばのゆかは水びたしで、ぼくのくつもすこしぬれた。あつかったし、すぐにかわいたから気にしなかつた。でも、いえにかえつてから、もしさむい日もプールが水びたしだつたらつめたいだらうなどおもつた。さすがにふゆは水はながさないのかな。でも魚はかい水がなかつたらよわつてしまふのかな。しつもんしたかつたけど、あとからきづいたので、おかあさんに言うと、えびすもとさんにメールでしつもんしてくれた。すると、「ふゆでもおなじようゆかに水がたくさんあります。さむくてつめたいです。」とすぐにへんじがきた。魚を生きたまま、魚やさんやたべる人にとってるために、たいへんなくろうがあるのがわかつて

びっくりした。

プールを見学しているとき、タコとタイをさわらせてもらつた。まずはタコ。ゆかに出されたタコは、ものすごい早さでうみの方にスルスルとあるいてにげだした。すべつているみたいに、八本のあしを上手にうごかしている。さわるとスルスルとろとろで、スライムみたいだつた。きゅうばんはかたくて、あしや体はふにやふにやにやわらかくてぜんぜんつかめない。ゆでたタコはプリツとしているのに、生きているタコはやわらかくて、ふしきだと思つた。タコは、りょうしさんがタコつばをしかけてつかまえていると思つていたけれど、じつは明石ではタコつぼりようはほとんどしていないことを見つめた。そこびきあまりようでとつていてるそだ。タコは、ぼくたちがみんなでがんばつてつかまえようとしてもぜんぜんつかまえられなかつた。でも、えびすもとさんがひよいつとつかまえて水そうにもどしてしまつた。あんなに上手にタコをつかまえられるなんて、めちやくちやかつこいい。つぎはタイ。タイはしめられていたので、うごかなかつた。体じゅうにびつしりとうろこがあつて、かたかつた。えらのうしろに、ひらひらした赤いひもみたいなのがついていた。口にはとがつたはがたくさんあつて、したもみえた。タイのうろこが一つ、ぼくの手についた。タイは赤いのに、うろこはとうめいだつた。赤いかわのタイが、とうめいなうろこのふくをきているみたいでおもしろいなと思つた。

明石うらでせりにかけられる魚のうち、明石のおみせにいく魚は、三十。パー。セントくらいだそうだ。ほかの魚は、とうきよう、なごや、おおさかにおくられる。ほつかいどうやきゅうしゅうにはこばれる魚もいる。明石のおいしくてしんせんな魚は、日本ぜんこくでたべられているんだな。そんなとくべつな魚を、すぐにかつてたべられるなんて、明石にすんでいるぼくはしあわせだ。もつともつと日本の人みんなに、明石の魚のおいしさをしつてもらいたい。でも、そうすると人気がでて、ぼくがたべる分がへつてしまうのかな。

さいごに、りょうしさんや魚やさん、せり人にしつもんをさせてもらつた。ぼくが一ばんきようみしんしんだつたのは、せり人一年生のいとうさんだ。もともとせりにきょうみがあつたから見学会にきたし、ぼくもおなじ一年生だから、きいてみたいことがたくさんあつた。せり人のいとうさんは、せり人になる前はせりのてつだいなどをしていたそうだ。せりばに魚を出したり、魚のかごをせりいりするしごとだ。せり人のすがたがかつこよかつたからせり人になつたそうだ。半年かかつてせり人のべんきようをして、今もしゅうに三かい、二十分ずつべんきようをしているとおしえてくれた。ふつきんとはいきんをきたえて、大きなこえを出されんしゅうをしたりもしているそうだ。たくさんの魚やのおじさんたちの前で、あんなにどうどうとせりができるのは、きつといつぱいべんきようしているからだと思つていたのに、ぼくの方がべんきようじかんがながくて、びっくりした。大人はべんきようのじかんがみじかくても、いろんなことが上手ですごいなと思つた。いとうさんは、あさ九時にせりばにきて、りょうしさんのてつだいで、ふねから魚をおろしたり、プールにはこんだりする。十一時からせりをする。せりのあとは、ぎょきようがかつた魚のしゅつかじゅんびをして、せりばやプールをかたづけて、ゆうがた四時半にしごとがおわる。水よう日と日よう日

は休みで、休みの日はつりに行つてゐるそうだ。魚が大すぎなんだなと思つた。せりの時に言つていたじゅもんみみたいなことばのひみつをおしえてもらつた。あれは、せり人がきめた魚のねだんや魚のとくちようを手とこえで魚やさんにつたえていたそうだ。「つり（でとれた魚）やからきれいやで」とか「ごちあみの魚やで」とか、魚やさんがねだんをつけやすいようにきこえるようだ。せり人をしていてむずかしことは、魚のねだんをきめること、たのしいことは、せりで魚のねだんがどんどん上がつていくこと、とおしえてもらつた。せり人によつて、同じ魚でもねだんがちがうことがあるらしい。せり人もテクニックがあるんだな。いとうさんが二年生や三年生になつて、せりがもつと上手になつてしまつたら、魚がたかくなつて、ぼくがたべている魚のねだんもあがつてしまふのかな。それはこまるな。

見学がおわつてかえるとき、いとうさんがりょうしさんたちと、かんコーヒーをのみながらたのしそうにしゃべつていた。りょうしさんやせり人やおさかなやさんは、ともだちとどんなはなしをするのかな。いとうさんはせりの時、はげしくてこわいくらいのいきおいで、きびしいかおをしてじゅもんを言つていて。でも、ぼくのしつもんにこたえてくれた時やとぼくたちのことなんてかんけいなく、いつもとおなじようにしごとをしているのを、あんなにちかくでじつと見たのは、はじめてかもしない。ぼくのおとうさんも、しごとの時には、あんなにしんけんでかつこいいかおをしているのかな。こつそり見てみたいな。ぼくは大人になつたら、いとうさんみみたいに、しんけんにたのしそうにできるしごとがしたいと思つた。明石うらぎよきようの見学は、たんけんみたいだつた。ドキドキわくわくして、はじめてしつしたことやかんがえたことがたくさんあつた。ぎよせんの中を見学したこと、のりのようしょくのはなし、りょうのほうほう、りょうしさんにきいたはなし、ほかにもたのしかつたことやもつとしりたいことがいっぱいだつた。ぎよきようのたんけんは、ぼくのなつやすみさいごの、さいこうのぼうけんになつた。

つぎの日、おかあさんといつしょに、うおのたなに魚をかいにいつた。ハマチやカレイやガシラ、シタビラメ、ヒイカ、タコ、アナゴがざるに入つてうられていた。魚やさんのおじさんに、「せりとぎよせんを見学してきました」とはなすと、すこしせりのことをおしえてくれた。せりで、魚やさんが「ぜつたいかいたい」と思つたら、ひじをまげて、ぐいっとひきよせるみたいに手をうごかしてアピールするそうだ。「ちよつとでもおくれたら、おそい！ゆうて、おこられるんやで」とふじながせんぎよてんのおじさんはわらつてゐた。あんなに早口でせり人がはなすことをきいたり、魚のことを見てすぐにかうかかわないかをきめたり、ねだんをつけたり、いちどにいろんなことをしなければいけない魚やさんはたいへんだ。ぼくは、きっとせり人や魚やさんは、さんすうがとくいで、すごくあたまと目と耳がいい人たちなんだと思つた。魚やさんにならんでいる魚が、いつもよりももつとおいしそうに見えて、大きなシタビラメを二びとハマチを一びかつてもらつた。

きょうも、マンションのベランダからうみにうかんでいるふねがたくさん見える。あのふ

ねには、はなしをきかせてくれたそこびきあみりようしさんがのつてているのかな。あつちのふねは、小さいから一人のりのつりぎよせんかな。きょうはどんな魚がとれたのかな。ぎよせんのいけすにいっぱいとれていたらしいな。プールには水色のかごがずらあつとならぶんだろうな。せり人一年生のいとうさんは、きょうも十一時からしんけんなかおでじゅもんを言つてせりをするんだろうな。いつも見ていたうみだけど、ぎよきょう見学に行つた日から、まえよりもいきいきしているみたいに見える。いせいのいいこえがきこえてきそうな気がする。ぼくは、今日も明石のおいしい魚をもりもりたべて、明石のぎよぎょうをおうえんしたい。

さんこうぶんけん

「目で見る明石のさかな」

山寄清張著

神戸新聞総合出版センター